

阪神大震災20年

神戸大学3年の時に阪神大震災が起きた。実家のある奈良市から大学に通っていた。私自身は大きな揺れを経験しなかったが、報道や友達との電話でだんだん神戸の被害が分かってきた。

被災地を見に行こう。手ぶらでは何やから、足りないと言われている物資を持って行こう、と大学を目指した。でも阪急神戸線は西宮北口駅から先が不通。そこから歩いたが、芦屋で挫折し、芦屋市役

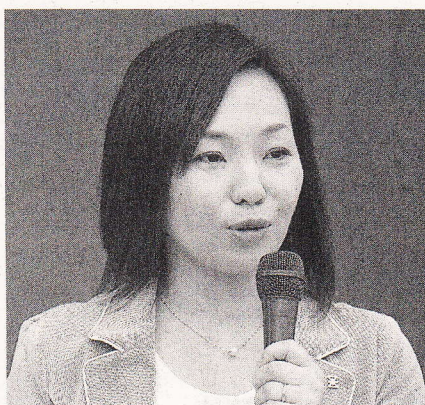


関学大連続講義から

住民自治学んだ避難所

尼崎市長 稲村和美さん (42)

A 4217



いなむら・かずみ 神戸大在学中に阪神大震災が発生。仲間と神戸大総合ボランティアセンターを立ち上げ、初代代表に就いた。証券会社員、県議を経て、38歳だった2010年11月、尼崎市長選で初当選。当時全国最年少の女性市長となった。今年11月に再選し、現在2期目。

所で初めて震災支援のお手伝いをした。

ボランティアはたくさん来ていたが、彼らをコーディネートする長期のスタッフが欠けていた。一度実家に帰り、泊まり込みでどこかの避難所を手伝おうと行ったのが、神戸市東灘区の避難所でした。

ここでの体験が、政治に関

わる原点になった。

避難所の小学校は、いずれ子どもへ返す場所。トイレ掃除の当番をどうするか、喫煙や飲酒を校内で認めるか、といったルールを、ボランティア、学校の先生、被災者の3者で毎晩会議を開いてつくっていった。

自分たちでつくったルールは、押しつけられたルールと違い、非常によく守られる。

ルールが現状に合わなくなったり、不都合が起きたりしたら自分たちで変えていく。そういうことが避難所という非日常的な空間で当たり前に行われていた。非常にダイナミックな「住民自治」の学びの場でした。

ただ、復興が進むにつれて学生の力ではどうしようもない限界も見えてきた。

例えば被災者の住宅再建。公共施設や道路はすごいスピードで復興したが、「個人の資産を税金で応援することはできない」というのが当時の国の見解だった。

何かいい支援策はないかと勉強する中で「私たちの税金の使い方は誰が決めているんだろう」と興味を持ち、やがて政治に足を踏み入れるきっかけになった。

題には一つの正解はない」ということ。それまで学校では常に一つの正解を探してきたが、世の中に出ると、まず何が問題なのかすら分からない。人を困らせる問題があることはわかるけど、その核心が何か分からない。そういう問題発見力とも言えるべき力が、自分に欠けていたということに気づかされた。

世の中の課題は、手に負えないことがいっぱいある。あまりにもそればかり見ると、逆に何もできなくなる。だから、一歩引いて「ここなら自分にできる」ということから始める経験を阪神のボランティアでさせてもらった。

今、東北の地で、多くの若い人たちが同じ経験をしていると聞く。東日本大震災の復興も長い道になるだろうが、そんな若い人々がたくさん出てきて、全国的なつながりになればいいと思う。

(構成・宮武努)